

うなものだが、記憶をそのまま生かして書くことの多いこの作家の執筆風景がちらと覗けて見えるようで、これはこれで面白い。エッセイは、子供の尻をぶつ先生の姿を核に、もうひとつ、尻をぶたれていた子供が成長して外交官として姿を現したのに驚いた、時の経過への思いがそこにからまっている。

中野は「その後何年間かは気になって仕方なかったあの汚い絵のことも、もう気にもなくなってしまう。」と書いているが、絵はどうなったのだろうか。先生にしても、書

齋で額縁の中から自分を見つめている日本の教え子がその後ハイネについての本を書き、さらに小説を書いて、その中に自分らしい人間が登場するなどとは思いつかべることなかっただろう。中野が初めてドイツを訪れたのは1965年のことで、この年5月ベルリンとワイマルで国際作家集会が行われ、それに参加するためであった。しかし、知るや知らずや、先生はすでに1956年に亡くなられていて、中野がその書齋にふたたび絵を見出すことはなかった。

●写真説明

表紙写真：「ヴォールファルト先生送別記念写真 1921年7月 四高正面玄関前」
前列中央ヴォールファルト先生、右端中野重治（中野重治夫人原泉さん提供）

平成17年度金沢大学資料館特別展「科学技術史研究の卵たち」 金沢大学資料館公開講演会「保存された四高物理機器」について

金沢大学資料館では特別展「科学技術史研究の卵たち」を、平成17年10月31日から11月11日まで資料館展示室で開催した。来館者数285人。

図書は保存されるが、実験機器は保存されることが少ないのが現状である。そのような中で四高物理機器が移転という危機を何度も乗り越え現存しているのは、保存しようとする強い意志が働いていたからに他ならない。

この四高物理機器は百年以上保存され、すでに「科学技術史資料」と言っていってよいであろう。しかし、今年度小立野キャンパスから角間キャンパスに移転してきた工学部の実験機器等はまだその年数には至ってはいない。これから保存していくことで「科学技術史資料」になる卵たちである。今回はこれら四高物理機器と工学部の実験機器を中心に展示をした。

またこの他、洋学の導入に伴い幕末の藩校において自然科学教育に使用された書物、実験機器を使用していた工学部の前身校金沢高等工業学校関連資料も合わせて展示した。

今回の特別展はテレビや新聞に取り上げられたことで、多くの入場者があった。

公開講演会「保存された四高物理機器」は特別展期間中の11月9日、本学名誉教授竹村松男氏が中央図書館 AV 室にて講演を行った。来聴者数33人。

講演内容は四高物理機器の保存に尽力された、竹村先生が、先人の跡をついでどのように保存してきたかを丁寧に講義され、講演者と聴衆が一体となるなごやかな雰囲気での講演会であった。

この講演要旨は『金沢大学資料館紀要No.4』に掲載する。
(資料館 田嶋)

